

伊波の概要

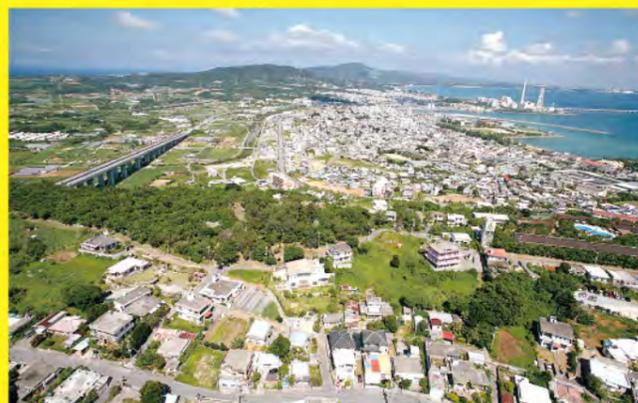
伊波集落は、沖縄本島で最も細い石川地峡に位置し、集落は金武湾を見下ろすカルスト台地に立地します。北東は石川、南東は東恩納、北西は恩納村仲泊に接し、「イハ」「イファ」と呼ばれています。

伊波集落には、国指定史跡「伊波貝塚」や県指定史跡「伊波城跡」等の遺跡があり、先史時代から人々の生活の場であった地域です。

また、古くから伊波集落に伝わる「伊波メンサー織」や伊波ヌールが葬られている「伊波ヌール墓」、「伊波金細工鍛冶道具」が市指定文化財になっています。

「伊波金細工鍛冶道具」は、伊波の屋号「金細工」家が所有する鍛冶道具で、王府時代に鍛冶屋を生業としていた金細工家を使用していたものです。金細工家の発祥や当時の鍛冶屋の状況がうかがえる貴重な民俗資料として、また沖縄の打組踊り「金細工節」に登場する加那兄の遺品として認識されています。

また、石川・嘉手苺・山城・東恩納の各集落も伊波集落の人々から始まったと伝えられています。



伊波城跡から見た石川の市街地

INFOMATION



沖縄県うるま市教育委員会
〒904-2292 沖縄県うるま市みどり町一丁目1番1号
TEL(098)923-7182

うるま市
文化財シリーズ 18

伊波

I F A

「伊波」の地名は1610(慶長15)年に薩摩藩によって行われた「慶長検地」の検地帳では、「伊覇村」とされていますが、1737(元文2)年に琉球王府によって行われた「元文検地」の検地帳では「伊波村」とされており、以後「伊波」と表記されるようになりました。

地域では「イファ」と呼ばれています。



沖縄県うるま市教育委員会



うるま市指定文化財「伊波メンサー織」

古くから伊波集落に伝わる織物が「伊波メンサー織」です。地機の原型と思われる原始的用具を用いて織られ、日本に現存する織物では、北海道の「アットゥシ織」、東京都八丈島の「カップタ織」、「伊波メンサー織」のあわせて3例しかみられず、非常に貴重なものです。

沖縄県内には、「ミンサー」あるいは「メンサー」と呼ばれる織物がありますが、伊波メンサーは、高機や地機を使用せず身近にある織具を用い、「イザリ織」という方法で織られている点がほかにはみられない特徴です。

「イザリ織」とは、経(たて)糸を長く伸ばして、糸の片端を立ち木等に括りつけて引っ張り、織りながら前に進んでいく技法です。「ゲーシ」と呼ばれる竹製のへらや申状の道具を用いて文様を織り出す織技法と原始的な織具は、現在沖縄県内には類例がみられず、伊波集落にのみ残るものです。

持ち運びが容易なことから、昔は家の裏庭や庭先、道ばた等に織具を持ち出し、女性や少女が気軽にメンサーを織っている姿がよく見られたそうです。

一般的にメンサー(ミンサー)の図柄は緋や浮き織りなどが主です。伊波メンサーの「ゲーシ花」と呼ばれる文様もゲーシを使って経糸をすくい、浮き織り文様を織り出したものです。

織の技法や図柄は遠く南の方から伝えられたといわれていますが、そのルーツやルートは今も謎に包まれています。

インドネシアやフィリピン南部、ラオスの方にもメンサー文様に似た織物があるようです。

伊波メンサー織の織技能、織具はともにうるま市の指定文化財になっています。



伊波城跡を中心とした文化財マップ

伊波城跡（県指定史跡）

① 中森城之嶽 ② 森城之嶽 ③ 三ツ森城之嶽 ④ カチヌハナ

伊波城は、城壁が「コ」の字形（単郭式）で、自然石の積み上げ（野面積み）により築かれた城です。13世紀頃に、今帰仁王子が伊波按司となって築城し、5代目伊波按司が首里に転居した際に廃城になったと伝えられています。

グスク時代の土器や外国産の陶磁器などのほか、先史時代の土器なども出土しており、先史時代から人々が住んでいたことがわかっています。

城内外には4箇所の拝所があり、伊波集落のウマチーなど祭祀行事等が行われ、また県内各地からも参拝者が訪れています。



伊波貝塚（国指定史跡）

1920年（大正9年）、大山柏氏によって発見された縄文時代後期（沖縄貝塚時代前期頃）を代表する貝塚です。



この貝塚からは、大量の土器・石器・骨・貝製品が見つかっています。ここから出土した土器は、「伊波式土器」と名付けられました。

⑨ 伊波ヌール墓（市指定有形民俗文化財）

集落の祭祀行事を司った歴代の伊波ヌールが葬られている墓と伝えられています。

1994年（平成6年）の調査で、琉球石灰岩の家形厨子甕、マンガン掛厨子甕、転用厨子甕

（生活雑器）等が見つかりました。甕の中には2体分の骨が納骨されているのが確認されました。厨子甕に銘書はなく被葬者については不明です。

墓の形式は崖下の洞穴を利用した掘込墓で、築造はおおよそ1700年代と推定されています。

⑫ 伊波ウブガー

伊波集落で最も古いといわれている井泉です。生活用水としてはもとより、産湯、正月の若水、

病気の際のミジナティ、亡くなった際の死に水等、霊水として使用されていました。

石川バイパス整備の際、地下横断路を作り、場所、位置、形を変えず、昔のままの姿が残っています。伊波集落及び市内の門中によって拝まれています。



⑭ 伊波ヌール墓

伊波仲門門中が管理する墓で、同門中の始祖（伊波按司）が葬られていると伝えられています。伊波按司の子孫は中頭や島尻方面へと散らばり、沖縄各地には伊波按司一族に関わる伝承が残されています。現在も子孫等多くの参拝者が訪れています。

⑮ 尚泰久王墳墓の跡

第一尚氏第6代「尚泰久王（在位1454～1460年）」の墓跡と伝えられています。伝承によると、第一尚氏第7代「尚徳王（在位1461～1469年）」の亡き後、第二尚氏の尚円王（在位1470～1476年）政権が代った際、首里の天山陵に葬られていた尚泰久王の遺骨がひそかに移葬されたといわれています。それを隠すためかこの墓は「クンチャー墓（乞食墓）」などと呼ばれていたそうです。1908年（明治41年）尚泰久王の遺骨は、第一尚氏に縁のある人達によってこの墓から玉城村（現 南城市）當山へ再び移されました。

⑲ 伊波按司の墓

⑳ ウミノイ墓

第一尚氏第6代「尚泰久王（在位1454～1460年）」の母あるいは乳母が葬られた墓と伝えられています。

1982年（昭和57年）に発掘調査が行われました。墓の中には、石灰岩製の石厨子が3基あり、中央に位置する大型の石棺からは、風化の進んだ人骨、鳩目銭2枚と猪の第3臼歯が検出されました。石棺に銘書などはなく、人骨は石棺の造られた年代より前のものとされています。また伝承にある「尚泰久王の母の墓」との確証は得られなかったと報告されています。

毎年、清明祭の頃には伊波仲門門中、大屋門中や尚泰久王に縁のある人々が多く訪れ、拝まれています。



㉑ 伊波ヌンドウチ・神アシャギ

伊波城跡入口の手に殿内があり、神アシャギとヌール屋が並んで建てられています。

神アシャギは、村々において神を招請して祭祀を行う場所とされています。ヌール屋には、火又神が奉られており、かつて、ここでヌール達がノログムイ（共同生活）をしていたと伝えられています。



㉒ 伊波仲門

伊波按司の子孫と伝えられている門中です。

『南島風土記』によれば、伊波按司は首里に引き上げた後も、伊波親雲上仲賢の名で伊波の地頭職を務めたとされています。その事から、仲門の始祖は、伊波城内から住居を城の外へ移した5代目伊波按司の子孫であろうと考えられています。仏壇には按司神、ウミノイビ神の香炉のほかに、按司時代に稲の穂を運んだという伝説が残る鶴の香炉も祀られています。



㉓ ピンジリ

伊波按司の子孫と伝えられる仲門家の東北側に位置する拝所です。

石積み造りの祠の中に高さ30cmほどの丸い石を霊石として祀っています。この祠の前には「山城仁屋から道光（中国暦）23年（1843年）に供えられた」と記されている石製の香炉が置かれています。伊波集落のアブシバレー（旧暦4月15日）、苗種御願（旧暦10月20日）、解き御願（旧暦12月24日）などの祭祀行事で参拝されています。



㉔ 伊波大屋

伊波集落に最初に居住した人の直系の子孫と伝えられる門中です。

仏壇には根人・根神が奉られており、かつて、大屋の妻子は伊波ノ口とともに祭祀行事の中心となる神人の役割を務めました。

また、今帰仁按司の遺児が今帰仁から、嘉手刈のメーヌティラに逃れてきて、伊波村の大屋の娘と結ばれたという言い伝えがあります。



㉕ 伊波火又神

伊波の守護神として奉られており、「ジーチ火又神」とも呼ばれています。

この火又神と伊波メンサー作業所がある場所との間が、伊波集落の入口といわれており、旧暦4月15日にはこの入口と火又神もアブシバレーで拝まれています。

また、旧暦7月16日には祭祀行事として旗頭と獅子舞の演舞が奉納されています。



㉖ 数明親雲上の墓

数明親雲上は、第二尚氏第4代「尚清王（在位1527～1555年）」に仕えていました。

尚清王が久高島からの帰途、嵐に見舞われた際、船の舳先に立ち「おもろ」を謡って、風波を沈め無事帰港したといわれています。

この墓は、伊波原に所在する古墓で、地元では「屋嘉墓」とも呼んでいます。沖縄戦時には、伊波国民学校（現在の伊波小学校）の御真影の塚としても利用されました。

墓室内に石厨子、ボージャー型厨子、御殿型赤焼厨子などがありました。

